

「ギャンブルの負債は誰が払うのか」

佐藤文武、平野伸一、黒川亮介、市川祐介、丸山篤史 (MiZ 株式会社)
武藤佳恭 (慶應義塾大学)

ジョスリン・カイザーは「アルツハイマー病を治すギャンブル」という記事を書いた(1)。研究者たちは迷走しているように見える。研究助成金は増加しているにも関わらず、患者と家族の苦しみを癒す治療法は未だ霧の中にある(1)。

アルツハイマー病治療の開発が難航している理由は3つある(2)。一つは発症までに何年もかかり、その間は症状が明確に出ないことである(2)。二つ目は、早期に発症を知る良い方法がないことである(2)。二つ目の問題は、臨床試験の候補者を見つけること、という三つ目の問題と同根でもある(2)。

医薬品開発のボトルネックは、何よりも安全性の確保にある。逆に、安全性が担保されている限りにおいては、患者や家族の同意と支援団体の協力を得た上で、様々な新しい治療法を試すための敷居を下げるべきではないだろうか？アルツハイマー病のギャンブルに負けて、誰が苦しむのかを真剣に考えなければならぬであろう。

参考文献:

1. Jocelyn Kaiser, The Alzheimer's gamble, Science 31 Aug 2018: Vol. 361, Issue 6405, pp. 838-841
2. <https://qz.com/1282482/why-the-pharmaceutical-industry-is-giving-up-the-search-for-an-alzheimers-cure/>